

二十一世紀の人たちへの
真言宗の教(一)

真言宗とは、どんな宗教(宗派)ですかと質問されたら、九世紀の日本に生まれた、空海(弘法大師)の開創した宗教というのが正しいでしょう。

現在は密教という言葉が用いられていますが、これには佛教以外のものも、日本より他の土地のものも含まれているので、この言葉は不適當です。日本密教とも言いませんが、これにも空海以外の宗教が当然ふくまれるので、よろしくない。一言でいうと、真言宗とは弘法宗、空海宗であるという定義をしておいて話をすすめることにします。

真言宗とは何かという質問に答えるためには、空海が何故、真言宗という宗教を開いたか、主張したかということを考えてみましょう。

突然、空海が出現したわけではありません。空海は日本人であり、九世紀の人間です。むずかしい言葉でいうと、空海・真言宗というもの、空間と時間の中で考えなければなりません。

まず、空海が生まれた九世紀の日本、日本人の宗教について述べてみます。

当時の日本列島には、古くから住んでいた縄文人、朝鮮、中国、東南アジアから移住して来た人たちが混血して、大和政権というべき、天皇と、それをとりまく人たちに支配されていた。もちろん、古い時代のことですから、今日のような国家ではありません。これらの人々の宗教はどうであったのか。当時の支配者の書いた歴史書によると、空海より約二百年前、朝鮮から佛教が伝えられたと聞いていますが、これを、そのまま信じてはなりません。

また神道という言葉が使用されていますが、これも現在の神社本庁神道であると思っではなりません。

空海を逆のぼること二百年の前の日本人の宗教は、一定の場所、地域に集まって生活している者たちによって祭る絶対者があった。その絶対者は、その地域に住む人たちの生活を支配し、決定する力を持っていた。山に住む者たちには狩りの豊かさを与え、野を耕す

者たちには稔りを、海に暮らすものには安全を、またその逆に病気を、けがをと、吉凶を自由にした。その絶対者の名前とか、その祭る方法とかは、グループごとに異なっていた。大和政権が支配する地域を拡げて行くと共に、日本列島に住む人たちの宗教にも変化が起こって来ました。古事記と日本書記に書かれている神々は、名前も異なっており、その関係も違っています

が、そのことは日本列島に住む人たちの宗教の上に、政権というのが引き起こした変化を物語っています。この他に、東北アジアからの当来する人たちとの交りが加わる。彼等は、今日の言葉で言うところの儒教とか道教とか、シャーマニズムとかという宗教を持って来て、この日本列島に先から住んでいた人たちと、まじりあった。また宗教の上に変化が起こりました。

佛教の伝来も、それらの一つです。それが特記されたのは、佛教という宗教が国際性を持っていたからです。別の表現をすると、絶対者はちゃんと名前を持っており、經典という理論を持っていました。その理論に基づいて祭祀し、祈れ

ば絶対者は人々に吉を与え、凶を除いてくれました。そんな佛教が空海までの佛教でした。空海は、この佛教に引きつけられた。その勉強はむずかしい。また、その説くところの目標に達成することも容易ではない。佛教の説くところと、その目的に至る方法は、二十四才の時に書いた『三教指帰』をみると、十余年の後に人々に説いた真言宗の教をつかんでいない。

二十四才の空海が理解していたことは、永遠ということでした。解脱と言っても良い、佛の境地に到るということでした。その方法については、修行すべき土地を、先を求めて、さまよい歩いていたと言えます。しかし、空海が求めたものは佛教の伝来してから百数十年余の間、実践されてきた佛教から、より一歩進んでいたものであったことは確かだったのです。

それは、現在の学者の用語でいうと、空海が中国から帰って来てから説いたもの純密に対する雑密(古密)です。新しい祈りを二十代の空海は、漠然としてつかんでいた。それに付いては次回に述べることにしましょう。